南稜高等学校魅力化基本計画

令和８年３月策定

あさぎり町

目次

1.　南稜高校の現状

2.　あさぎり町としての現状と方向性

3.　熊本県における県立高校の方向性

4.　高校魅力化への考え方（策定の趣旨）

5.　基本計画の位置づけ

6.　魅力化推進の方向性

7.　魅力化のための取り組み

8.　推進体制とコーディネーターに求める資質や役割

9.　その他参考資料としての県内外の高校魅力化の取り組み

1. 南稜高校の現状

⑴入学者の状況

2024 年度　全体定員数 200 名に対し、124 名。（定員充足率 62%）
2025 年度　全体定員数 200 名に対し、124 名。（定員充足率 62%）
南稜高校の近年の入学状況は、全体として 1 学年 120 名規模で安定しつつあります。募集定員 200 名に対しては「定員割れ」の状態が続いていますが、R5 年度の 102 名から R6・R7 年度には 124 名へと入学者数が回復し、一定の充足率（約 62%）を維持している状況です。

⑵生徒の進路傾向

① 近年の傾向として就職 6 割、進学 4 割、管内就職率が上昇中しています。
管内就職率・・・35.4%（R4）、 39.0%（R5）、 42.1%（R6）
県内就職率・・・61.3%（R4）、 61.0%（R5）、 59.6%（R6）
県外就職率・・・38.7%（R4）、 39.0%（R5）、 40.4%（R6）

② 専門性を生かした就職（公務員・農協・土木建築・食品製造・介護等）は減少傾向です。
39.7%(R4)、36.2%(R5)、34.2%(R6)

進路の近年の傾向として、地元への定着が進んでいます。人吉・球磨地域への管内就職率が 35.4%（R4）から 42.1%（R6）へと着実に上昇しており、地域産業を支える人材を多く輩出してます。一方で、県外への就職も約 4 割（40.4%）に達しており、地元と広域の両面で進路が展開されています。また専門性を生かした就職（公務員・農協・食品製造・介護等）については、39.7%（R4）から 34.2%（R6）へと減少傾向にあり、生徒の職業選択が特定の専門分野に留まらず、より多様な業種へと広がっている現状を示唆しています。

⑶ 入学者属性等各種データ

① 主要な出身中学校の動向（地域性）
R5・R6 ではあさぎり中学校が最多（25 名～29 名）でしたが、R7 では 21 名に減少。代わって R7 では多良木中学校が 28 名と急増し、最大の出身校となっています。また、あさぎり、多良木、人吉第二、錦の 4 校で全生徒の約 7 割を占める構造は 3 年間変わらず、極めて強い地域密着型と言えます。

② 学科・コース別の「男女比」と「規模」の変化
総合農業科とスポーツコースは男子が約 9 割を占める男子中心のクラスとして一定の規模で安定しており、食品科学科は女子生徒が 7 割を超える人気学科として R5 から

R7 にかけて 15 名から 31 名へ倍増し、全体の入学者数を下支えしています。一方で生活経営科と福祉コースはほぼ全員が女子生徒で構成される少人数クラスとしての役割が定着しています。

【R5】新入生出身中学校別生徒数

※上段:男子　下段:女子

学科		水上	湯前	多良木	あさぎり	錦	人吉一	人吉二	人吉三	相良	五木	山江	球磨	その他	男子合計 女子合計	クラス合計
普通科	スポーツ	0	1	1	2	4	1	1	0	1	0	0	0	1	12	15
		0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	
	福祉	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	18
		0	0	3	2	2	0	6	0	0	1	1	0	0	15	
総合農業科		2	2	4	11	4	1	1	0	1	2	0	0	2	30	36
		1	0	0	1	1	0	1	0	2	0	0	0	0	6	
食品科学科		0	1	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	6	15
		0	0	1	3	1	1	2	0	0	0	1	0	0	9	
生活経営科		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
		0	1	3	3	5	0	1	0	1	0	3	0	1	18	
1年		2	4	8	15	8	3	3	0	2	2	0	0	4	51	102
		1	1	8	10	9	1	11	0	3	1	5	0	1	51	

【R6】新入生出身中学校別生徒数

※上段:男子　下段:女子

学科		水上	湯前	多良木	あさぎり	錦	人吉一	人吉二	人吉三	相良	五木	山江	球磨	その他	男子合計 女子合計	クラス合計
普通科	スポーツ	1	0	2	3	5	3	2	0	1	0	1	0	0	18	20
		0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
	福祉	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	3	18
		0	0	0	3	5	2	2	0	0	1	2	0	0	15	
総合農業科		1	2	4	10	4	1	7	0	0	0	0	1	3	33	42
		0	1	1	3	0	2	1	0	0	0	1	0	0	9	
食品科学科		2	0	5	2	1	3	1	0	0	0	0	0	0	14	24
		0	1	5	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	10	
生活経営科		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	20
		0	0	1	5	2	4	2	0	0	0	0	2	3	19	
1年		4	2	11	15	10	8	13	0	1	0	1	1	3	69	124
		0	2	7	14	9	8	5	1	0	1	3	2	3	55	

【R7】新入生出身中学校別生徒数

※上段:男子　下段:女子

学科		水上	湯前	多良木	あさぎり	錦	人吉一	人吉二	人吉三	相良	五木	山江	球磨	その他	男子合計 女子合計	クラス合計
普通科	スポーツ	0	0	2	2	2	1	3	0	1	1	1	0	0	13	15
		0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	
	福祉	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	11
		0	1	1	5	2	0	0	0	1	0	0	0	0	10	
総合農業科		2	2	9	5	8	0	7	0	1	0	0	0	1	35	40
		0	0	0	2	0	0	1	0	1	0	0	0	1	5	
食品科学科		0	1	3	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1	8	31
		0	0	10	3	0	1	6	0	1	1	0	0	1	23	
生活経営科		1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	27
		0	1	3	1	6	4	5	2	3	0	0	0	0	25	
1年		3	3	14	9	10	1	12	0	3	1	1	0	2	59	124
		0	2	14	12	8	5	12	2	6	2	0	0	2	65	

⑷ 生徒・教職員の魅力化に対する課題と期待値

①生徒が思う課題とコンソーシアムへの期待
ヒアリング対象者：生徒会長、農業科代表生徒、食品科代表生徒

【課題】
- 広報の課題： 中学校への魅力発信不足、中学生との交流機会の欠如。
- 進路の強み： 偏差値に左右されない国立大学への進学実績。
- 環境の課題： トイレの衛生問題（扉がない)、校内の段差（バリアフリー不足)。
- 教育内容の変容： 酪農の廃止、林業実習の減少（予算不足による座学化)。

【期待】
- 地域外との取り組みが多いが、もっと地域の人たちとやりたい。
- いろんな大人と話せたらいい。
- あさぎりの大人たちに南稜高校をどう思ってるか聞きたい。

②教職員が思う課題とコンソーシアムへの期待
ヒアリング対象者：1、２、３年生学年主任教諭

【課題】
- 広報・イメージの課題：地元あさぎり中からの入学者が少なく、本校の魅力が十分に伝わっていない。親世代や中学校教諭が抱く「昔の怖いイメージ」が根強く残っており、払拭できていない。
- 交流・アクセスの制限：南稜祭の発表が平日のため中学生が参加できず、魅力を直接伝える機会を逃している。また、公共交通機関の便が悪く、通学の利便性に欠けている。
- 施設・支援体制の不備：施設の老朽化が顕著で、トイレの洋式化も進んでいない。また、教員以外の自由度の高い支援員が不足しており、特別支援を要する生徒の実習拒否等への対応も困難な状況にある。
- 生徒の規律と連携の不足：生徒が相手（教員）によって態度を変えるなど指導上の課題がある。また、近隣高校との連携や、生徒が「南稜ならなんとかなる」と安易に考えて進学してくる現状への対策が不十分である。

【期待】
- 高校の先生と中学校の先生の交流会があったらいい。
- スクールバスの設置。
- あさぎり町で支援員の確保。
- タブレットの負担軽減（町の半額補助など)。

◆　のびのびとした教育、癒しを中学生へアピールしたい。
◆　地元中学校へ魅力を伝えたい。

③生徒と教員の課題と期待の理解
学校の設備や教員の多忙化に課題がある中、地域や中学校との連携を繋ぐコンソーシアムへの期待が高まっています。特に特別支援などの現場負担に対し、外部支援員や行政の補助といった外部リソースの投入が教育の質を保つ鍵となります。外部とのネットワークを強化し学校の閉鎖性を打破することで、教員の負担を減らしつつ生徒の進路保障に繋げることが不可欠です。地域と共創する新しい教育モデルを構築し、南稜ならではの魅力を「選ばれる理由」として発信していくことが求められています。

⑸　特別支援教育への対応体制の課題と改善点

①　現状の課題と授業所見
教員への聞き取りや授業見学から、以下の課題が挙げられる。
・教員の指示が通らない、暴言が多い、不適切行動が増加している。
・保護者連携や中学校との情報共有が不足している。
・転退学が多く、売店での不十分な食事も課題となっている。
・授業見学では、歩き回る生徒や参加できない生徒、多段階の声掛けが必要な生徒が多く見られた。少人数のクラスは落ち着いている傾向が確認された。

②　脳科学に基づく行動課題の分析
・前頭前野（PFC）の発達遅れ:立ち歩きや衝動的発言などの行動は、刺激に反射的に反応してしまう PFC の発達遅れ（同年代より 2〜5 年遅れる場合がある）と関連があると考えられます。
・抑制機能（No-Go）の弱さ:自律神経の乱れ（交感神経が優位な状態）が PFC の働きに影響し、行動抑制が難しくなっていると考えられます。

③　対応体制と改善案
南稜高校の課題を「脳機能と環境のミスマッチ」と捉え、指導の統一や環境整備、実行機能の育成による解決をする必要があります。特に、農業高校の特性を活かし、自律神経を整える食事等を授業に導入することや科学的根拠に基づき、農業を通じたセルフケアの学びを深めることで、生徒の適応と学校生活の充実を図れると考えられます。

⑹　関係機関等の高校を取り巻く大学、企業、地域団体について

①　普通科（スポーツコース）
・あさぎり町健康推進課…「あさぎり町健幸教室」への生徒派遣の実施。

・NPO 法人くまもとあそび LABO…「野外の運動実習」球磨川流域を利用した実習の実施。
・地域のゴルフ練習場（新宮寺ゴルフ練習場）…ゴルフコース（熊本クラウンゴルフ倶楽部）を活用したゴルフ実習の実施。
・大学の出張講義を利用した授業…トップアスリート派遣事業を活用した授業の実施。

② 普通科（福祉コース）
１年生 （介護実習）
・あさぎり町ふれあいデイサービスセンター
・デイサービスセンターどんだん
・特別養護老人ホームあさぎりホーム
・リハビリデイサービスりゅうきんか
・特別養護老人ホームあずみ野
３年生 （介護実習）
・介護老人保健施設つつじのさと
・小規模介護老人保健施設もみの木
・介護老人保健施設愛生
・第二つつじヶ丘学園
・介護老人保健施設シルバーエイト
・小規模多機能ホーム五木の友
・特別養護老人ホーム龍生園
・グループホームえがお人吉
・特定施設ひまわりの里
・特別養護老人ホームりゅうきんか
・特別養護老人ホームあずみ野

③ 総合農業科（植物コース）
・株式会社ＩＳＥＫＩ…最新機器を活用した田植機と収量コンバインを使ってスマート農業を学ぶ。
・球磨地方青年農業者クラブ、球磨地域振興局農業普及振興課…「南稜就農塾」の生徒が地域農家視察等の研修。
・九州産交リテール株式会社…宮原サービスエリア上下線において南稜米の販売会の実施。

④ 総合農業科（動物コース）
・ホワイト酪農業協同組合、熊本県畜産農業協同組合球磨支所、球磨地域農業協同組合、球磨酪農農業協同組合と四者包括連携協定…畜産教育・搾乳実習の実施。
・球磨地域振興局農業普及振興課…新たな飼料稲の活用（ＳＧＳ：ソフトグレインサイレー

ジ）について試験栽培の実施。
・食品ロスリボーンセンター…県内五校の畜産系学科でエコフィード認証取得に向けて取り組んでいる。
・地域農家及び４組合…令和８年度第１０回和牛甲子園への出品、令和９年度第１３回全国和牛能力共進会への出品に向けての指導。

⑤　総合農業科（環境コース）
・『緑の流域治水』（河川整備だけでなく遊水地活用や森林整備、避難体制の強化等、自然環境との共生を図りながら流域全体の総合力を活用した治水）』に関する調査研究を継続実施。
・熊本県立大学…校内に雨庭を設置し、雨庭の普及啓発。
・京都大学、熊本県農村計画課…校内圃場に田んぼダムにし、田んぼダムの普及啓発を行う。
・東京大学、熊本県立大学…学校演習林内に雨量計や樹幹流の計測装置を設置し、森林の保水力について継続調査の実施。
・名古屋工業大学…学校演習林の水路にリーキーダムを設置予定で ある。今後、水量の変化について調査。
・東京大学先端科学技術研究センター、熊本大学と連携…人吉球磨地域の雨に関するデータ解析（ClimCORE）について調査している。
・球磨地域振興局林務課や球磨林業奨学会（人吉球磨地域にある林業事業体）…森林林業に関する研修を実施。
・熊本県建設業協会人吉支部…建築土木に関する研修を実施。

⑥　食品科学科
・くま川鉄道…熊本豪雨災害後の地域復興として防災食となるハヤシライス（くま鉄バヤシライス）の商品化。

⑦　生活経営科
・NEXCO 西日本 SHD、九州産交リテール株式会社…、熊本豪雨災害後の復興として地域食材を活用した商品開発。

南稜高校は、東京大学等の研究機関との産官学連携や豪雨災害からの復興を学びの核とし、スマート農業などの先端技術導入や和牛共進会を見据えた長期目標の設定を通じて、地域課題解決に挑む実践的なキャリア教育を展開しています。

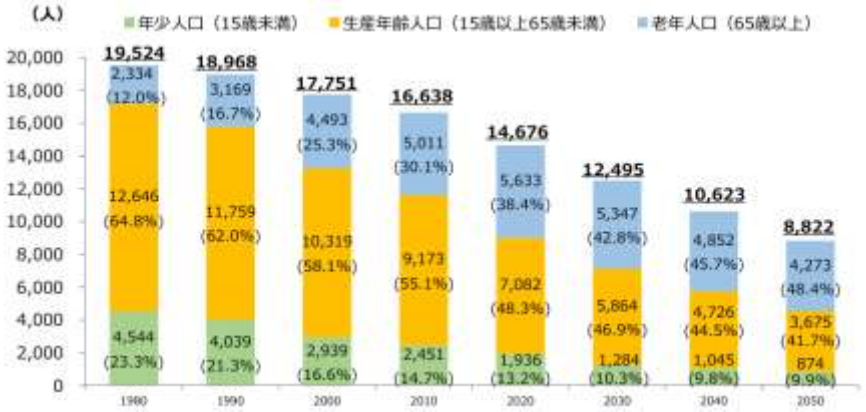
2.あさぎり町としての現状と方向性

⑴あさぎり町の現状と課題　参考：第３次あさぎり町総合計画より

①人口減少と少子高齢化

昭和 55（1980）年には 19,524 人であったあさぎり町（当時は旧５町村）の人口は、令和２（2020）　年には 14,676 人となりました。令和 32（2050）年には 8,822 人となり、総人口における老年人口　（65 歳以上）の割合は 48.4%、15 歳未満の年少人口は 41.7%になると予想されています（図表 1)。あさぎり町の高齢化率（65 歳 以上の割合）は令和２（2020）年時点で 38.4%と、熊本県（31.1%）や全国平均（28.0%）を上回っており、世界で最も高い高齢化率の日本の中でも高い高齢化率であるといえます。人口減少と少子高齢化対策は喫緊の課題であるといえます。あさぎり中学校を含め人吉球磨管内中学生の進路状況を見ても管内進学の増加には至っておらず、管外進学が減少し通信制や専修学校等への進学が増加傾向にあります。

図表 1



出典： 国勢調査（総務省）、日本の地域別将来推計人口（国立社会保障・人口問題研究所）

図表２　あさぎり町立あさぎり中学校進路状況

	年度別		令和4年度	令和5年度	令和6年度
全日制	県内	国公立	123	135	120
		私立	12	10	14
	県外	国公立	1	3	2
		私立	6	8	10
	小計		142	156	146
通信制	県内	国公立	0	2	1
		私立	3	0	8
	県外	国公立	0	0	0
		私立	0	0	0
	小計		3	2	9

参考：あさぎり町役場企画政策課

図表３　あさぎり町立あさぎり中学校人吉球磨管内進学状況

年度別	令和4年度	令和5年度	令和6年度
南稜	25	29	21
人吉	39	44	38
球磨工業	17	24	23
球磨中央	35	24	27
人吉五木	0	1	2
計	116	122	111

参考：あさぎり町役場企画政策課

図表４　人吉球磨管内中学生進路状況

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
管内	79.5%	78.4%	78.8%
管外	15.0%	14.9%	14.2%
その他（定時制・通信制・専修学校等）	5.5%	6.7%	7.0%

参考：あさぎり町役場企画政策課

⑵　あさぎり町としての今後の方向性

①　あさぎり町の 10 年後の在りたい姿
人が集い　支え合う　未来をつなぐ　「あさぎり町」

②　将来の目標人口
令和２（2020）年国勢調査によると、総人口は 14,676 人で、平成 22（2010）年国勢調査と比較すると、1,962 人減少しています。国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口によると、今後も減 少傾向が続く予想です。第３次総合計画において、自然増、社会増につながる積極的な取り組みを 行い、総合計画最終年の令和 13（2031）年の人口が 12,480 人以上となることを目指します。

出典：平成 22 年～令和 2 年は国勢調査、令和 7 年以降は町独自推計および 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

② 基本目標

■魅力ある就業・産業の構築

■魅力ある健康・福祉の構築

■魅力ある生活基盤の構築

■魅力ある教育・文化の構築

【地域で人を育てるまち】

・学校教育・・・地域で子ども、学校に関心を持つまち

・生涯学習・・・生涯学習が充実したまち

・文化・・・地域資源を大切にするまち

学校内だけでなく、地域で子供を育てていきます。そのためには、子育てが終わっても継続的に学校関心を持つことが重要です。また、住民一人一人が好きなことを楽しめる生涯学習が充実したまち、今ある資源を大切にする町でありたいと考えています。

3. 熊本県における県立高校の方向性　参考：県立高等学校あり方検討会

(1) 目指す学校像

① 時代に対応した質の高い学びや、地域の特色を生かした学びを 多様な主体とともに創る学校

② 世界や地域で活躍する人財を育てる学校

③ 多様な主体と協働しながら、社会に主体的に参画する心を育む学校

⑵　取り組みの基本的方向性

①　魅力ある学校づくりに向けた取組

これからの県立高校は、地域の人々・企業・大学等といった多様なパートナーと連携して、生徒一人一人の心に火をつけるような地域社会への貢献を通じて学ぶ機会を提供し、その経験を通じて生徒の志を育て、未来を切り拓く力を育んでいくことが、これから特に重要です。

■取り組みの方向性と主な施策

① 地域（地元自治体・企業等）等との連携・協働の推進	② 時代に対応した質の高い学びの推進
・地域との協働体制（高校魅力化コンソーシアム）の構築及びコーディネーター配置の推進 ・地域と連携したキャリア教育や専門的な学びの充実、半導体関連人材の育成 ・小中学校と連携した地域での教育活動の推進 ・地域の私立学校等と連携した教育活動の推進	・熊本スーパーハイスクール構想、高校間連携の推進 ・高大連携・高大接続の推進 ・グローバル人材の育成 ・ＤＸ関連人材の育成 ・ＳＴＥＡＭ教育の推進
③ 多様なニーズに応じた学びの場づくりの推進	④ 学びを支える教育環境整備の推進
・ＩＣＴの活用による遠隔教育の充実 ・全定通にとらわれない柔軟な学びの導入検討 ・インクルーシブ教育の充実 ・地域や学校の特色を踏まえた部活動の充実 ・外国にルーツを持つ生徒の学びの充実	・施設・設備の充実、通学や住まいの支援の検討 ・教職員の確保や弾力的な配置、スーパーティーチャー（指導教諭）の活用、業務の精選・重点化、スキル向上 ・教育ＤＸの推進

⑶　人口減少を見据えた教育環境の整備

魅力ある学校づくりに向けた取組を進めていくと同時に、以下の①～③の項目について、体系的に位置付けて計画的に進め、教育環境の整備を図っていきます。

①　募集定員の見直し

■現状と課題

現状において、県全体で約 60 クラス分の定員割れが生じており、中学校卒業予定者数の推移を見れば、今後 10 年間で更に約 50 クラス分の入学者の減少が見込まれています。また、中学校卒業予定者数が減少するのは熊本市外だけでなく、熊本市内についても、令和 9 年（2027 年）3 月卒業者から減少期となります。

■取組の方向性

・熊本市内の大規模校を含む全校を対象とした計画的な学級減を実施。
（R9～R16 年度に 62 学級減目安）
・定員割れによる学級減、統廃合の基準を策定。

（R10 以降適用、魅力化特例校※に認定された場合は適用除外）

※魅力化特例校とは…1 学年 3 学級以下の高校で、学校存続のために地域から必要な支援や評価が得られている学校

② 課程・学科のあり方

■現状と課題

〇全日制課程

募集定員の適正化を目的とした学級減を実施すれば、各校の小規模化が一層進みます。学校の著しい小規模化は、特に専門高校において学校運営や教育活動に与える影響が大きいため、人口減少時代の各学科のあり方を本格的に検討していく必要があります。

〇定時制課程・通信制課程

通信制課程のニーズの増大をはじめとする生徒の学習ニーズ等の多様化に対応するため、全定通の枠組みにとらわれない柔軟な学びの導入の検討が求められています。

■取組の方向性

〇全日制課程

・地域における学びの充実を目的とした、学科や学校の発展的統合も検討。

・柔軟で創造的な教育課程の実現のため、単位制の導入拡大も併せて検討。

普通科	中高一貫校の魅力化に加え、国の普通科改革の動き等を踏まえた、いわゆる新しい普通科（「学際領域に関する学科」や「地域社会に関する学科」等）の設置を検討
専門学科	本県の産業教育を持続・発展させていくため、知事部局の関連部署と連携した学びの深化や、細分化された学科の大学科への統合等を検討
総合学科	多様な学びを選択できるよう、大学科を統合した総合学科の新たな設置を検討

〇定時制・通信制課程

・多様な学習ニーズに対応するため、全定通にとらわれない柔軟な学びの導入を検討。

③ 通学区域・学区外枠

■現状と課題

通学区域については、将来の全県一区を視野に入れ、平成 22 年度（2010 年度）に旧 8 学区から現行の 3 学区に拡大されました。学区外枠についても、平成 22 年度（2010 年度）に 6.5%から 13%に拡大され、平成 24 年度（2012 年度）以降に 20%まで拡大することとしています。しかし、令和 3 年（2021 年）3 月のあり方提言時の熊本市内 7 校普通科の学区外合格者数の割合　（平均）は、8%程度と現行の 13%を大きく下回っていたことなどから、

更なる拡大は実施されておらず、現在でも同程度の割合にとどまっている状況があります。

◎通学区域に関する特例
・県境に位置する高校について、隣接する県外市町村からの募集人員を拡大。（普通科は最大 13%まで、その他は最大 20%まで）
・特色のある学科・コースについて、県外からの募集人員を拡大。（最大 40%まで）

■取組の方向性
・現状の維持： 都市部への集中を避けるため、当面は現行の 3 学区を継続。
・今後の方針： 教育の公平性や選択の自由を重視し、「全県一区」への拡大を検討する。
・スケジュールの目安：2029～2030 年度の中間見直しで検討（状況により前倒しも検討）。
・多様な受け入れ： 国内外から広く入学者を受け入れられるよう、柔軟な制度設計を目指します。

４．高校魅力化への考え方（策定の趣旨）

⑴　地域及び県内外の人々から『選ばれる高校』づくりを推進

近年、少子高齢化・人口減少が加速する中で、日本国内では毎年約 450 校の学校が統廃合の憂き目にあっています。これまでは小学校・中学校の統廃合がより進んでいましたが、熊本県内の公立高校も本格的な再編が行われようとしている中、南稜高校も大きな影響を受ける可能性が高いと考えられます。このような中、「地域の未来は若者がつくる、学校がない地域の未来はない」という想いのもと、高校の魅力化を推進する上で ①入学者対策 ②魅力ある授業づくり ③進学・就職などの出口対策は 三位一体で考え検討していくことが重要です。その上で昨今の少子高齢化・人口減少、そして本業務の目的に照らし合わせ、①県内・県外の高校との取り組みの差別化 ②地域の担い手を育む仕組みづくり ③地域内外の人々から応援される高校づくりの視点を踏まえ、あさぎり町の豊かな自然、伝統文化、農林業といった地域資源の価値と、南稜高校の学科の特徴や自然を活かした取り組み、健康を支える取り組みを「ウェルネス（心身の健康と社会的な幸福）」という視点でとらえ、新たな価値を創造できる「ウェルネスデザイナー」を育む高校づくりを進めていくことが必要だと考えます。地域住民や行政、高校、企業、関係機関等が一体となった南稜高校の魅力を高める「ウェルネス南稜高校魅力化コンソーシアム」を構築し、地域及び県内外の人々から「選ばれる高校」の実現に向けて推進していきます。

⑵　**高校魅力化コンソーシアムの構築**　参考：熊本県教育委員会ホームページ

①　目的

多様な主体（地域の住民や市町村、小・中学校、地元企業等）と高校が協働し、地域の子どもたちにどのように育ってほしいのかという目標やビジョンを策定するとともに、その実

現のための魅力ある学校づくりに取り組みます。

② 概要

高校と地元市町村が密接に連携し、地域の住民や、小・中学校、地元企業等の関係団体と構成する協働体制とします。

③ 期待される効果

・ビジョンの共有が図られ、目指すべき方向が明確化。
・属人的ではなく、組織的で、持続可能な高校と地域との協働体制構築。
・地域課題の共有、地域資源の有効活用による高校の魅力化。
・（高校側の視点） 社会に開かれた教育課程の実現・外部連携の充実・外部資源の獲得。
・（市町村側の視点）地域が求める人材の育成・高校を核とした地方創生。

④ コーディネーターの役割

（ア）高校におけるコーディネート機能

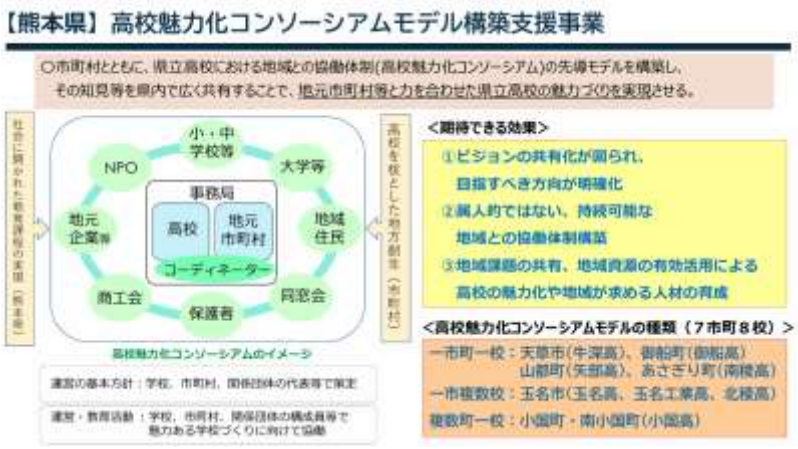
・地域社会と関わる教育活動の企画・運営・支援。
・地域側との連絡調整、情報提供。
・高校への地域資源（人・もの・こと・課題）の活用。

（イ）地域におけるコーディネート機能

・地域資源（人・もの・こと・課題）の掘り起し。
・高校側との連絡調整、情報提供。
・学校外で高校生を含む活動の企画・運営・支援。

（ウ）協働体制におけるコーディネート機能

・高校と市町村を密接につなぐ。
・組織体制の構築・運営。（ビジョン・計画づくり、事業や会議の運営等）
・外部資源の獲得。（寄附、ふるさと納税等）



出典：熊本教育委員会

5. 基本計画の位置づけ

本方針は、第 3 次あさぎり町総合計画及び南稜高校との連携協定に基づき策定するものである。

6. 魅力化推進の方向性

南稜高校は、あさぎり町やその他周辺を取り巻く豊かな自然、伝統文化、農林業といった地域資源を「ウェルネス（心身の健康と社会的な幸福）」の視点で再定義し、新たな価値を創造できる「ウェルネスデザイナー」を育みます。生徒一人ひとりが、自らの心身を整えながら、地域の課題をクリエイティブに解決し、持続可能な未来を主体的にデザインしていく力を養うものとします。次の通り基本的な方向性として明示します。

⑴今後の少子化やこれまでの入学者の傾向、地域性などを鑑みて、あさぎり町と南稜高校が一体となり、地域一丸となって次代の担い手を育む機会へとつなげていく。
⑵各学科の現状の取り組みとあさぎり町の方向性や地域資源を鑑みて、ウェルネスをデザインする取り組みとして整理し、『ウェルネスをデザインする人材』を育む機会としていく。
⑶地元の専門家や起業家を講師に招き、多角的な視点から「健やかな暮らしと産業のあり方」を構想する力を育むことで、南稜高校を「地域の未来を担うリーダー」が育つ拠点へと進化させる。

7. 魅力化のための取り組み

⑴既存知の再定義と「ウェルネス」への統合
これまで各学科が培ってきた専門知を、人間の幸福（ウェルネス）という共通の価値基準で整理します。単なる技術習得にとどまらず、その技術が「いかに心身の健やかさや社会の豊かさに寄与するか」を問い直すカリキュラムへと転換を図ります。

⑵あさぎり町や周辺地域全体を「生きた学びのラボ」とする広域展開
あさぎり町及びその他周辺地域の豊かな自然や伝統文化を、感性を研ぎ澄ますための「素材」として捉え、地域社会そのものを思考と実践の実験場（ラボ）と位置づけ、生徒が地域資源に新しい意味を吹き込むプロセスを通じて、持続可能な未来を共創します。

⑶多様な「他者」による感性の触発
地元の先駆者や起業家、外部の専門家といった多様な価値観を持つ「他者」とのかかわりを通じて、地域の課題を「可能性」へと変換するクリエイティブな思考を養い、正解のない問いに対して自らの意志で解を描き出す「構想力」や「主体性」を触発します。

⑷自己と地域の「循環的レジリエンス」の構築
生徒自身が自らの心身を整える「セルフ・ウェルネス」を起点とし、その充足を地域社会の活力へと波及させる循環モデルを目指します。個人の幸福と地域の持続可能性を分かちがたいものとして捉え、変化の激しい時代においても、しなやかに未来を切り拓く「レジリエンス（適応力）」の種を地域と共に育みます。

8. 推進体制とコーディネーターに求める資質や役割

⑴推進体制
学校、あさぎり町、地元産業界が参画する「ウェルネス南稜高校魅力化コンソーシアム（仮称）」を設置する。学校内にとどまらず、あさぎり町やその周辺地域全体を学びのフィールドと捉え、行政の施策や企業の資源と高校の探究活動を組織的に結びつける体制を構築していきます。
また、コーディネーターや熊本県教育委員会などとの更なる連携を図り、高校に対する効果的な支援となるよう努めます。

⑵魅力化コンソーシアム委員について
コンソーシアムの設立にあたり、行政・教育・産業・学術の各分野から、専門性とリーダーシップを兼ね備えた有識者を招聘すべきであると考えます。
本コンソーシアムは、あさぎり町と南稜高校の更なる連携が必要であるため、あさぎり町の町長を会長に、南稜高校の校長を副会長に据え、近隣町村の有識者を参画させることで、地域一体となった推進体制を構築していきます。
専門的知見を深めるため、座長には地域計画や教育の専門家を迎え、あさぎり町教育委員会と共に教育課程の質を高めます。さらに、産業界からはウェルネスに精通する地元企業の代表者や専門家、また地域と連携しウェルネスに取り組んでいる県外企業にもお声掛けをし、「まちづくり×ウェルネス」の視点を取り入れた、持続可能な地域社会の実現を目指します。

⑶コーディネーターに求める資質や役割
コーディネーターには、学校と地域の境界を越えて新しい学びの形をデザインする「変革の伴走者」としての役割が求められます。
具体的には、あさぎり町と南稜高校の可能性と価値を言語化し、地域内外の方々に示しつつ、教員が教育活動に専念できるよう地域の専門家や起業家と学校を繋ぐハブとなり、プロジェクトを円滑に進行させる調整機能、そして、生徒が自らの意志で解を描き出せるよう、教えるのではなく問いを深める対話を通じた伴走支援。さらには、地域の多様な資源を「ウェルネス」という価値に翻訳し、戦略的に外部へ発信する広報的な役割を担います。

資質としては、地域の課題や生徒の自由な発想を「チャンス」として共に楽しむ感性と、行政・地域・教育といった異なる組織文化の間を軽やかに動き回る柔軟な交渉力、教育の理想と地域の実践を「ウェルネス」の視点で結びつけ、未来を共に構想できる人材が理想です。また、地域及び学校で育てるべき若者の方向性と組織体制を生み出していくマネージャークラスの統括コーディネーターと学校と地域のつながりを強化していく推進コーディネーターの２名を配置することが必要と考えます。

9. その他参考資料としての県内外の高校魅力化の取り組み

・矢部高校（山都町）：「地域魅力化型」として、地元の山都町と連携した活動を展開。
・八代工業高校: 「マイスター・ハイスクール」として、肥後銀行などの産業界が教育課程の編成に直接参画し、先端技術を学ぶ環境を整備。
・隠岐島前高校（島根県）：「地域課題解決型学習（探究学習）」の先駆け。島全体を学びの場とし、コーディネーターが地域と学校を繋ぐ体制を確立。
・久住高原農業高校（大分県）：「地域みらい留学」を活用し、全国から生徒を募集。地域の自然を活かした専門的な農業教育が評価されている。
・真庭高校（岡山県）：イノシシ肉の活用など、地域の負の遺産を特産品に変える商品開発を通じ、生徒の「創り出す力」を育成。